

市民ランニング界での貢献を称える 第17回ランナーズ賞受賞者決定 ～12月1日(水)授賞式開催～

市民ランニングの普及、発展に貢献した個人・団体・大会などを表彰する第17回ランナーズ賞(主催:ランナーズ賞運営委員会)が決定した。

過去16回で50の個人・団体が受賞してきたが、今回は、和田彰・紀代子ご夫妻、藤岡経子さん、松田千枝さんの3組。受賞者の詳細は、雑誌ランナーズの2005年1月号で紹介。

ランナーズ賞授賞式は12月1日(水)ウェスティンホテル東京で行われる。

40代で失明、50歳から走り始め 妻の伴走で47都道府県のレース制覇 和田彰さん(70歳)・紀代子さん(64歳)

会社勤めをしていた彰さんは45歳の時、視力に異常を感じ、47歳で退社。50歳から走り始め、日本盲人マラソン協会に入会。ランニング経験のなかった紀代子さんに伴走を懇願し、できるだけ初めての場所での大会を選ぶうち、平成15年4月29日の山田記念ロードレース(秋田県大館市)で47都道府県の大会制覇となった。大腸癌・盲腸癌も克服。

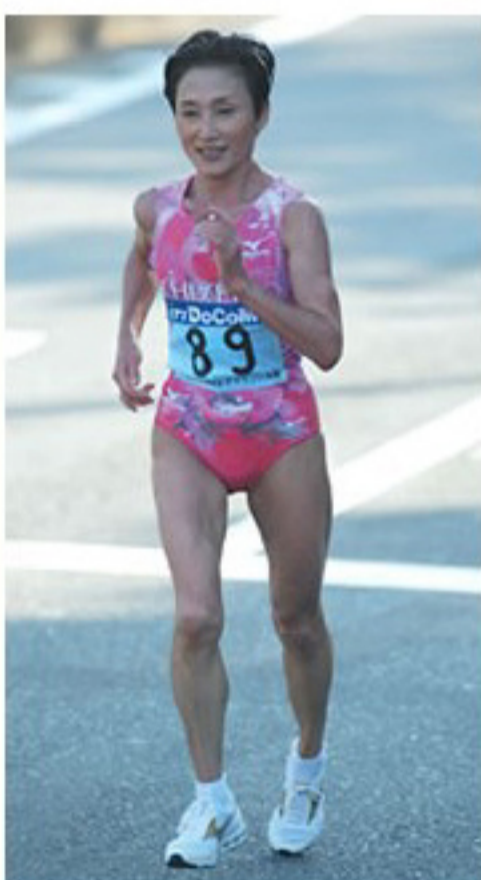
70歳になった今年、念願の100kmを二人で完走。盲人と還暦以上のランナーの普及に力を注いでいる。



生涯スポーツの楽しさを 自ら走って伝える 障害者施設「かしわい苑」勤務 市川市体育指導委員(34年目) 藤岡経子さん(73歳)

学生時代、短距離選手だった藤岡さんは結婚後、健康のために走り始め、地元・市川元旦マラソンでは女性の門戸を開いた女性参加者第1号。1986年にはホノルルマラソンでフルマラソン初完走。以来、他大会と合わせ、今年のホノルルで40回のフルマラソン連続完走となる。

助産師・看護師・鍼灸マッサージ師・さらにスポーツプログラマー他の資格を持ち、スポーツ指導に役立っている。ケア用品をたくさん持って走り、レース中でも、ケガ人を放っておけないという。スポーツイベントの企画・運営、講演活動、自身のトレーニングなどスケジュールびっしりの藤岡さん。夢は南極マラソン出場だ。



「歓走」を目標に走り続ける 女子マラソンのパイオニア 松田千枝さん(56歳)

第1回東京国際女子マラソン(1979年)に出場して以来、今年で23回目。自己最高は1985年の2時間36分38秒。

翌1986年には松田さんを中心に「資生堂ランニングクラブ」が発足。

現在も毎朝1時間のランニングを日課にし、サブスリー(フルマラソンで3時間を切る)の走力を維持。さらに、「走りの美」を表現したいと考えている。特に今年は、「地唄舞」の静かで途切れのない動きを取り入れたという。「最高の喜びを表現して走ったら、美的だし、心地よいし、皆さんに共感していただける。だから、歓喜の歓という字をとって『歓走』を目標に走っています」

ランナーズ賞とは――

市民ランニング界に広く貢献する方に贈られる賞で、長年に渡り、市民ランナーの模範的生活を送り、健康であることの喜び、ランニングのすばらしさを多くの人々に伝え、また仲間を作り、さらに地域の社会体育を考えていく、そのような地道で有意義な活動をされている人、団体、その他、有形無形を問わずに表彰するものです。一般公募制とし、毎年、雑誌「ランナーズ」の誌上やインターネット「RUNNET」にて募集し、受賞者には正賞のレリーフと、副賞として賞金30万円が贈呈されます。

選考委員長	佐々木秀幸氏(日本陸上競技連盟理事)
選考委員	青木高氏(健康・体力づくり事業財団主任研究員)
	有吉正博氏(東京学芸大学教授)
	野田晴彦氏(スポーツドクター)
	増田明美氏(スポーツジャーナリスト)
	下条由紀子(月刊ランナーズ編集長)
名誉選考委員	小野三嗣氏(東京学芸大学名誉教授)

昨年の受賞は、(写真右より)走り旅の先駆者『阪本真理子さんと日本100マイルクラブ』、幅広い活動を続ける『ぎふ長良川走ろう会』、知的障害者を対象としたランニングクラブを創設・指導されている『横田昭夫さん』の3組だった。



過去に受賞された方が活躍されています 第15回受賞 貝畑和子さん(51歳)

病弱な少女だった貝畑さんは、大阪国際女子マラソン17年連続出場を始め、数々のウルトラマラソンや超長距離での活躍・実績が認められて2002年に受賞。

今年3月1日からロシア横断マラソンに挑戦し、モスクワやバイカル湖などを経由し、10月10日ゴールのウラジオストクまでの約9000kmを走破した。



昨年のランナーズ賞受賞者表彰式